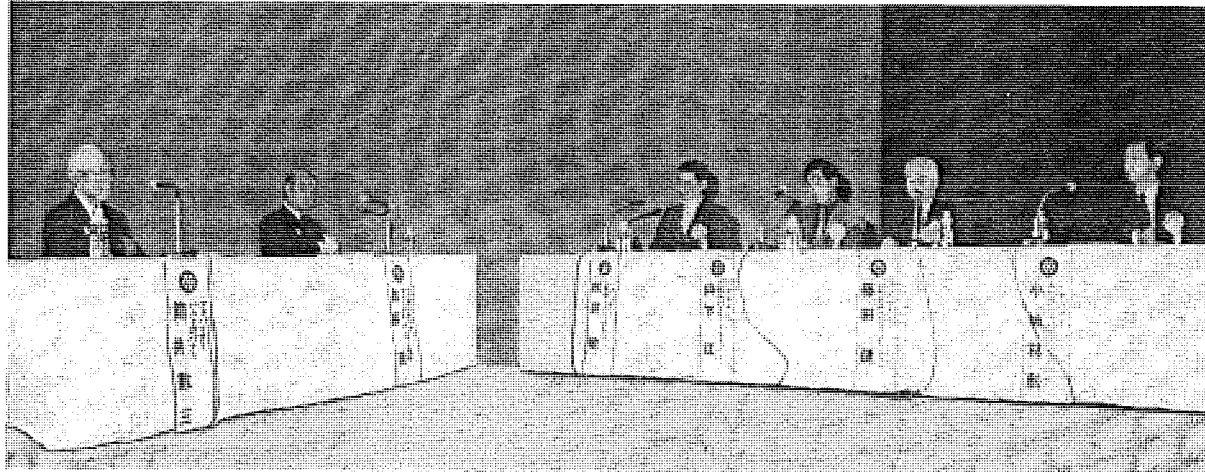


シンポジウム

サブテーマI 「ロータリーの基本について」



アドバイザー 筒井 数三 (パストガバナー)
コーディネーター 佐藤 孜 (グループ4ガバナー補佐)

パネリスト 松井 敏 (広島RC)
山下 江 (広島北RC)
藤田 健 (広島安芸RC)
小城 林 勲 (大竹RC)

【司会者】

それでは、ただいまより「ロータリーを考え、行動し、夢を」をテーマに、シンポジウムを行いたいと思います。

今日は、3部門に分かれております。

まず第1部門「ロータリーの基本について」をテーマに行いたいと思います。

それでは、マイクをコーディネーターの佐藤孜グループ4ガバナー補佐の方にお渡ししたいと思います。ガバナー補佐、よろしくお願いいたします。

【佐藤孜ガバナー補佐】

司会の方のご指示で、本日のメインでありますシンポジウムの開会をいたします。

先ほど、川妻ガバナーの方からも、国際RI会長のお考え、あるいは川妻ガバナーのお考え等を反映して、このような企画を組んでくれたかと思うというごあいさつをいただいて、まさにそのとおりでございます。

3部に分けさせていただいて、そのグループの数字の順番でございまして、グループ4がこの第1部、サブテーマIとしてございます「ロータリーの基本について」ということです。

この3つに分けました基本あるいは活動、将来についてというのを、過去の歴史、基本的なことなどでございます、それから活動は現在、現在いろいろな活動をなさっているのを中心に、あるいは3番目の未来はそのとおり将来、未来というふうな、過去、現在、未来というふうに読み替えていただいてもよろしいかと思います。

皆様、ご案内のとおり、間もなく2年後、2005年に国際ロータリーが100周年を迎えようとしております。今を去ること50年前になりますが、ちょうど国際ロータリーの50周年記念の年に、広島ロータリークラブが中心となりましたロータリアンが、広島市民に広島市公会堂を寄贈しましたということは、皆様ご周知のとおりだと思います。

戦争中一時中断、あるいは解散を余儀なくされていたロータリー活動は、昭和20年9月に早々と再開準備がされたようであります。その大きな力が、やがて広島の財界、市民を巻き込みながら、広島市公会堂をつくる大きな力となり、その力が戦後の広島の復活、発展に大きく寄与、貢献したということをお伝えしております。

そうしたロータリーの活動、連携が、次々と新しいロータリーを誕生させたのもご案内のとおりでございます。本日、本席にご出席の先輩諸兄にもその当時のことをご理解、ご記憶のあられる方がたくさんおられると思います。

私どもにちょうどいたしましたサブテーマ「ロータリーの基本について」に沿って、過去を観点に、各クラブの現在に至る歴史的な流れ、クラブの伝統的な継承あるいは活動等について、それぞれのパネリストにお話をちょうだいしたいと思います。

まず最初に、当地のロータリーの看板と言えます、歴史と伝統の広島ロータリークラブを代表して松井様の方からご発言をちょうだいいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

【広島RC松井様】

ただいまご紹介にあずかりました広島ロータリークラブの松井でございます。

ロータリーの基本というふうな大きなテーマでございますので、私まだ入会して11年ということでございますので、まだまだ未熟でございますし勉強もしておりませんので、そんな大それたことをお話しをするようなことは何もないんですけども、私の所属しております広島ロータリークラブの歴史の一端をお話をさせていただいて、責任を果たしたいというふうには思っております。

少し勉強をしてこなきゃいけないなというふうには思ったんですが、なかなかいつもの癖で、昨日になりまして一夜漬けをしようということで、何か読まなきゃいけないなと思ったんですが、結果私の父が最期に亡くなる前に書きまして、亡くなった後に出しました「大正生まれ」という本があります。その下巻に、これは4章立てになっているんですが、その最後の4章めに「ロータリーなかりせば」という項目があります。そこが一番最初に、「ロータリーゼーションの時代」というふうな文章を父が書いておまして、それに助けを借りて今日の役目を終わりたいというふうには思った次第でございます。

この一番最初に、私の父はちょうど今から71年前の1932年2月でございますけれども、広島ロータリークラブのチャーターナイトがありまして、そのときにうちの父は12歳ぐらいだったと思いますけれども、私の祖父がチャーターメンバーであったものですから、連れて行かれてチャーターナイトに出席をしたというふうには書いてございます。

それ以降、自然にロータリーに馴染み親しんだというふうには文章の冒頭に書いてございます。それ

から、先ほど佐藤ガバナー補佐のお話にもございましたように、戦争が始まりまして、ご承知のとおり、ロータリーは軍部からの迫害を受けて解散をさせられるということになります。随分私の祖父も3代目の会長を務めさせていただいたということもありまして、軍部と一生懸命掛け合って、何とか続けさせてほしいということを申しておったようでございますけれども、やはりフリーメースンとロータリーは変わらないというようなこととかいろいろなことがあって解散をしるということになったようでございます。祖父は大変悔しい思いをして、大変悔しがっていたということを父は印象に残っているということでございます。

しかし、何としてもロータリーの絆を守り続けたいということで、広島火曜会というものを組織いたしまして、例会を火曜日に続けるということをしたということでございます。

この伝統が現在にも続いておるということで、私どもとしては例会をとにかく大切にしようということで、例会を中心にクラブというものを考えるということで、現在も、例えば例会の変更を一切しない、夜に懇親会をするにしてもその昼間の例会は通常とおり行うというふうな形で、クラブ例会というものを中心に考えているということだというふうに理解をいたしております。

やはりその地域にはあらゆる職業、あらゆる立場の方がいらっしゃいますので、そういった中で親睦を培って、お互いにそれぞれの立場に立って真剣にいろんな忠告をし合ったり話し合ったりしながら、新しい社会と申しますか、難しく言えば社会秩序を作り出すということが、この例会の最も重要な課題だというふうなことで、出席も義務づけられているというふうなことだというふうに理解をしております。

ですから、ロータリーの基本というのは、一番最初にとにかく例会であるというふうに思っている次第でございます。

もう1つは、やはり奉仕の心と申しますか、先ほども歌にございましたように奉仕の心だというふうに思います。

もう一度この本に返らせていただきますと、私の父はガバナーをさせていただいていたときに、ロータリーの真髄と申しますか、その辺を何だろうかというふうに一生懸命考えた末、納得のいく結論に達したのは、国際協議会に出発する直前であったというふうな書いてありますけれども、これによりますと、「ロータリーの精神とは他人に対する思いやりと助け合いの精神である。それを奉仕の心、奉仕の



精神と申している」ということであります。それから、その理想とするところの奉仕の精神というものは、単に理想を説くだけではなくて、それをビジネスマンみたいに日々の企業行動の中で実践させる、個々の天職と申しますか仕事を最大限に公正に機能させることによって、この社会を最適化するための世界的なサポートシステムだというふうなことを言っております。これは大変難しい言葉で私もよくわかりませんが、やはり仕事の中で、やはりクラブクラブでいろんな社会奉仕をされる、もちろんそういうことなんですけれども、基本はやはりそれぞれの日々の企業行動の中での実践であるということだろうというふうに思っております。

私も今から社会奉仕の話とかいろいろお話があると思っておりますけれども、ぜひとも広島ロータリークラブとしては、やはり基本というのはクラブ例会であり、職業奉仕であるというふうに考えているということで、私どもが教えられているところだということでございます。

以上でございます。

【佐藤ガバナー補佐】

ありがとうございました。

ご案内のとおり、松井さんはお父様がガバナー経験者でいらっしゃいました。そういう関係で、子どもの頃よりロータリーを生活の中に実感、実施されていたというお話。ただいまのお話でよくわかりました。今後とも、ロータリーの歴史、伝統を引き継いでいただいて、継承していただきたいというふうに考えます。

今お名前が出ました松井パストガバナーにつきましては、後刻お隣の筒井パストガバナーからお話が伺えるかと思えます。大変大きな足跡を残された偉人でもあられました。

それでは、続きまして、広島北ロータリークラブの山下さん、ひとつご発言をちょうだいいたします。

【広島北RC山下様】

はじめまして、広島北ロータリークラブの山下江です。

こういう壇上でしゃべるのは久しぶりのことなんですけれども、うちのクラブは広島北といえれば何であるか、川妻ガバナーが公式訪問されたときに、開口一番、「北と言えば野球と太田川だよ」というふうに言われました。全くそのとおりなんです。うちのクラブでは、野球に関しては、筒井パストガバナーがガバナー杯を創設いただきまして、非常にありがとうございました。

うちのクラブは、全国のロータリークラブの野球大会の1回目と2回目を連続優勝しておりまして、野球のことになると目の色が変わってくるという、それぐらい熱心に練習をやっているわけですが、あくまでも親睦ですので、ほどほどにということはあるんですけども、親睦に非常に役立っている野球というのが一つのうちのクラブの特色です。

今日は、その野球の方はさておきまして、もう一つの太田川プロジェクト、社会奉仕のことについて若干ご報告させていただき、私の意見も述べさせてもらえたらと思っております。

当クラブでは、1998年から99年度の創立30周年記念事業におきまして、「太田川流域の野生生物と私たちの暮らし」というテーマを掲げまして、それ以降5年間にわたって同じテーマで太田川流域の環境保全運動を行ってきております。

その第1回目は、広島市内の小中学生徒による環境保全テーマとした図画・ポスター展、自然環境を考えるパネルディスカッションを行っております。

次の年度におきましては、2000年6月ですけれども、太田川の源流域ですね、一番上の方、芸北地方に行きましての八幡湿原という太田川の本当に源流ですけれども、ここでカキツバタの植物観察会、臥竜山ブナ天然林観察やパネルディスカッションなどを行っております。

その次の年度は、何回かあるんですけれども2000年8月に、今度は太田川の下流域の古川で野菜採取ゲームや河川の清掃、それから翌年度の3月には広島市安佐動物公園にて太田川に住む山椒魚などの野生生物についてのパネルディスカッションなどを行っております。

そして、4回目は2001年9月から12月にかけてなんですけれども、源流と下流とききましたので、今度は支流で何かをしようということで、沼田町の奥畑地区において泥んこ競技、田リンピック、田んぼの中でかけっこをするわけですけれども、それとかハナミズキ30本記念植樹、ホテル保護に取り組んでいる奥畑住民に対するホテル公園記念碑の贈呈というようなことを行っております。

そして、今年度は、私たちの生活にとって切っても切れない水の問題を直接的に取り上げようということで、もちろん太田川の水ですけれども、水の確保と治水、この2つの観点から加計町におきまして、去年の11月温井ダムと環境保全というシンポジウムを行いまして、同時に、環境保全とダム建設の調和の願いを込めて、桜の木30本を温井ダム湖畔に記念植樹しております。

また、この3月には、世界子ども水フォーラムというのが琵琶湖周辺にて行われますが、100万ドルの植樹を行い、その主催団体の1つであるユニセフに寄附をするというようなことを考えておりまして、太田川ということテーマにして、社会奉仕の一環としてこういう運動をしております。

ロータリーは、ご承知のとおり基本的には単年度主義というのをとっているわけですけれども、切り口は違いますけれども、同じテーマで続いてこういう活動をしているのは若干珍しい方ではないかなと思っております。

私たちは、こうした奉仕の理想をみずから体験しながら自己変革を目指すとともに、対外的に環境保全アピールとロータリーの宣伝を行ってきたと思っております。

基本ということなので、そういうパネリストを命ぜられてから若干頭の中にそれがあったわけですが、新入会員のロータリー情報に立ち会うことがありまして、改めてロータリーの原点が奉仕であるということについて、私自身が再確認をするという経験がありました。そのことを若干述べさせていただきますと、ロータリーの効用というのが第1から第4まで、もう御存じのとおりで私が申すまでもないんですけれども、改めて私が確認したという意味でしゃべらせていただきたいということなんですけれども、第1から第4まですべて奉仕なんですね、よく見てみますと。

第1は、奉仕の機会として知り合いを広めることというふうに書かれております。第2というのが、職業をとおしての奉仕という意味での職業奉仕、そして第3が、個人生活、事業生活、社会生活での奉仕の理想の適応、社会奉仕ということだと思えますよ。そして第4が、国際奉仕による世界平和というふうに、これははっきり書かれておりまして、1から4までがすべて奉仕であると。それをほかの言葉でちょっと解説しているところを見ますと、ロータリーというのは親睦をもとにして人が集まって、そこから職業奉仕が生まれ、社会奉仕に成長し、それが広がって国際奉仕になったという、要は奉仕というふうに書かれておりまして、改めて奉仕ということがロータリーの基本中の基本であるという認識

を、私は認識した次第であります。今になって認識するというのはお恥ずかしい次第でもあるんですけれども。

そういうことで、私たちはロータリー活動に参加することによって奉仕に参加することができるんだと。奉仕の喜びを感じることができるんだと。また、自分を奉仕する人間へと高めることができるんだという、そういうところにロータリー活動に参加する喜びというのがあるのではないだろうかと思っております。

親睦も非常に重要です。しかし、親睦のみではやはり寂しいのではないのでしょうか。親睦と奉仕という車の両輪を絶えず目指して、ロータリー活動をしていきたいと思っております。

以上です。ありがとうございました。

【佐藤ガバナー補佐】

新進気鋭の弁護士でいらっしゃる山下さんですが、私は先ほど事前打ち合わせで要らんことを申しまして、「先生、お願いだから短くして」と言ったら、本当に短くされたので、今コーディネーターはドキドキしているのですが、幸せなことに私は野球が大好きなので、野球の話が一番先に出るかなと思ったら、やっぱり出ました。北です。その野球のロータリー野球の運用やガバナー杯を創立者でいらっしゃるバスターガバナーが隣におられるので、ちょっと本筋とは違うのでお叱りをいたぐかもしれませんが、野球の話をちょっとしていただけたらなと思うんですが。

【筒井ガバナー】

こうした席上で野球の話をするということはどうかと思うんですが、野球を通じましての親睦ということも大いにあるものでございますから、どういうわけで今のロータリー野球をやっているのか。実は94年、95年度ガバナーを拝命しましてから、北ロータリークラブに公式訪問いたしまして、11時から12時まで約1時間が会長、幹事との懇談会というのがございますが、その会長、幹事の懇談会も15分か20分ぐらいで打ちきられまして、「ガバナー、野球好きですか」と言って、そのときの会長山本さんがおっしゃられて、「はい、私は野球が好きです。カープのファンです」という話をすると、それから野球の話になりまして、ぜひ2710地区の野球、クラブ同士の野球を始めたらどうかという話になりまして、「それは結構ですよ」と申しました。それから95年に入りまして、ある会において何も話もないものですから、「山本さん、どうなったんかいの」とこう申しましたところが、「いいですか、ガバナー」とこう言う。「あなたがおっしゃるようにロータリーの親睦に役立つであろうから、やってもいいですよ」ということを申しまして、それから始まったわけでございます。たしか95年の5月が第1回ではなかったらと思います。それから、「地区の方からどれだけ寄附をしてくれるのか」というので、「そうか、そう言うなら」ということで、そのときに予算化してありませんでしたので、実を申しますと30万円ほど寄附したことを覚えております。

ところが、この野球は最初は広島市内の5クラブぐらいでスタートを切りましたが、去年は第8回を迎えまして、その途中小野田の土屋ガバナー、大塚野球はロータリーの親睦に役立つということで、30万円ではとても経費が足りないということが北ロータリーから持ち上がりまして、50万円ほど土屋ガバナーの時代から出していただくようになったと、私は聞いております。



そのようにしてロータリーの野球は始まりまして、私も毎年始球式をさせていただいておりますが、だんだん年とともにキャッチャーまでボールが届かなくなりましたが、始球式のボールをちょうだいしまして、私の部屋には8つほど台をつくって、置いています。ロータリー野球が非常に親睦に貢献したと思います。

ただここで、先ほども奉仕と親睦という話がございましたが、ロータリーにおける親睦というのは、奉仕のための親睦であるから、このロータリー野球を通じての親睦がさらに奉仕部門にも発展してくれば良いということを願っております。

以上でございます。

【佐藤ガバナー補佐】

ありがとうございます。

それでは、続きまして安芸ロータリークラブ藤田さん、ご発言をいただきます。どうぞ。

【安芸RC藤田様】

ただいまお話をされました松井さんのお父さんがガバナーのときに、ここにおられます筒井さんが当時分区代理といっておりました。で、松井ガバナーが「筒井さん、ひとつつくれや」と。「何をつくるんですか」と言うたら「新しいクラブつくれや」と。で、筒井さんが辛苦してつくったのが、広島安芸ロータリークラブでございます。いつまでたっても小さいんです。その安芸ロータリークラブの藤田でございます。年はとっておりますけれども、まだロータリークラブができてから12年しかたっておりませんから、私も12年の若輩でございます。間違ったことばかりしゃべると思いますが、どうかお許しください。

そこにおられます広島南ロータリークラブの姉妹クラブがハワイ島のヒロにございます。ヒロロータリークラブです。私も先年、南クラブのお方にご一緒しましてヒロに参りました。ヒロクラブの会員の広島出身3世でたしか佐々木さんといったと思うんですけども、ゴルフを一緒に回りまして、そのときの話ですが、「日本ではロータリークラブに入るのがいたしいんじゃそうなのお」と。このヒロにおられる方は3世でも、純粋の広島弁でしゃべられます。「いたしいんじゃそうなのお」と。「別にい

たしいことはないんじゃが、銭も要るしろう」と返事しました。「それでもようけ入るのか」「さあ、よけは入らんよ」と返事しました。「銭要るいうて、年間何ぼぐらい要るんな」「まあ5千ドルぐらいかの」「うわあ、要るんじゃのう。こっちの方じゃ1年間で千ドルありええで。この間郵便配達のおじさんが会員になったで」「局長か」と言うたら、「いや、配達のおじさんだ」と。ちょっと日本では考えられない話でございますが、なぜ日米でこう違うか。両国のロータリークラブの生い立ちをたどってみたいと思います。

まずは、本家のアメリカですが、おじいさんに育てられたポール・ハリスが、23歳でアイオワ州立大学の法学部を卒業して弁護士を目指します。それまでに随分あるんですけども、時間が5分で納めろということなので、23年をあっという間に言います。その卒業したときに先輩に勧められまして、5年間の社会勉強の旅に出ます。教員をしたり、新聞記者をしたり、一番よくしたのが大理石のセールスマンだそうですが、船員になってイギリス見物など、いろいろな体験の後、28歳のときにシカゴ、よほどシカゴが気に入ったらしいんですね。で、法律事務所を開きます。仕事が順調だったとって歴史は残っておりますが、そんなに順調だったとは思えないのですが、何かやはりよそ者ですから友だちの少ないのに悩んだようです。

ポール・ハリス37歳の1905年、当時日本は明治38年ですから、ロシアと日露戦争真っ最中ですよ。2月23日、この頃は今で言う瀋陽、奉天の戦をしておった頃ですが、シカゴの若い実業家の石炭商、それから鉱山技師、洋服商、この3人と会合を開きます。自分の構想をぶち上げるんですが、翌日、後で歌で有名になりました印刷業者、この人は何か印刷業というのは金持ちが多いらしくて、後々までポール・ハリスと話が合わなかったという人なんです、加わりまして、この4人、それからあと2人がすぐ入るんですが、だれも100年しないうちに全世界で120万人の大きな組織になるだろうとは思わなかったと思います。

この最初の6人の全員がよそ者だった。そうしますと、やはり友だちが少ない、友だちを求めてのクラブづくりがロータリーの原点だったと思います。

異業種の実業を集めた、1業種1人ずつ集めた、これはポール・ハリスが本家ではないんです。ポール・ハリスがイギリスあたりをうろろしておったときに、イギリスあたりでやはり1業種1人というクラブがいろいろあったらしいんですね。それから始まったんですが、どちらかというと同業者に足を引っ張られておもしろくないことが随分あったんだろうと思います。これが職業奉仕の始まりです。

会員が次から次へ増えてまいりますと、最初から裕福な人も入ってきます。これだけ人間がおるなら何かしようやと。2年目には市役所の近くにトイレをつくったと言いますけれども、これが社会奉仕の初め。そのうちにカナダを初め、外国のクラブがたくさんできてまいります。それが国際奉仕部門といわれる最初だと思えます。

これで4奉仕部門がそろったわけですが、次には日本です。大正9年に東京ロータリークラブが誕生しますが、生まれ方そのものが全然アメリカとは違います。ダラスで三井物産の福島さんという人が綿花の買い付けをしておりまして、よく南の人種差別のあるところで白人でない福島さんがロータリークラブに入れてもらったと不思議なぐらいなんです、ダラスロータリークラブに入会しまして、そのうち東京に転勤します。東京にもクラブをつくらぬかというふう勧められまして、尻込みしながら向こうからいろいろな書類をもらって帰りました、その中に条件がありまして、特別代表をウォルター・ジョンソンにする、このウォルター・ジョンソンという人は、パシフィックメールとい



う汽船会社の横浜支店長です。それまでに上海ロータリークラブの会長をしております、本部の方も特別代表にはこの人がいいだろうと。しかし、福島さんは困りました。第一、日本にそんなに人脈がありません。旧知の三井銀行の米山さんに相談しました。米山さんがまた忙しいお方なので、そのうちにやっとかさ重い腰を上げて名簿を作りました。その中から特別代表がアメリカ人だから英会話ができんにやならん。書類は全部英語でくるから英語の読み書きができにやならん。で、それをできる人を探してみますと24人しかおりません。米山さんが会長で、福島さんが幹事、そのほかには日本銀行とか東京都の交通局長とか、三越とか、当時日本を代表する一流の名士ばかりでございます。

福島さんが、その当時は毎週あったわけではないので、福島さん、2度ほど東京ロータリークラブに出たら大阪に転勤になりました。で、大阪へ行くと、この人は熱心な方で、また自分が幹事になって大阪ロータリークラブをつくります。そのうち、神戸、名古屋、京都、横浜、台湾のタイペイ、その次が広島ですね。このどこへきてても会員も皆超エリートといいますが、その町を代表する方です。もう時間ですね……

私らが広島で10番目にできたんですけれども、超エリートの続きのお方あたりが、私らを見つけて、「質を落とすなや」とおっしゃいます。私は質がいいとは絶対に思うてはおりませんけれども、やっばり目の前で「質を落とすなや」と言われますと、「おまえは質が悪い」と言われたようで、あまり嬉しい気はしなかったものでございます。

この辺で終わります。

【佐藤ガバナー補佐】

ありがとうございました。

歴史的なお話も十二分に拝聴し、またその中でクラブの運営、会費の問題等々、ご示唆をいただいたように解釈しております。

広島東ロータリークラブの高橋さんはいらっしゃいますか。恐れ入ります、ご発言があれば。特に東クラブさんは活性化委員会ですか、大変ユニークな委員会だということで、川妻ガバナーも大変これを評価されております。ご発言がありましたら、どうぞフロアからですがしていただけますか。

【広島東RC高橋様】

広島東クラブの高橋です。

今日は、フロアでさくらをやれと言われていましたので、こういう格好で指名を受けるとは思っていませんでしたので、ちょっとコーディネーターのお気に召さないかもしれませんが、私がかねがね思っておりますことを述べさせていただいて、皆様のご意見を伺いたいと思います。

私はロータリアンの三大義務の一つである例会出席、先ほども松井さんがこれが基本の一つだとおっしゃいましたけれども、この例会出席についてかねがね思っておりますことをお話して、問題を提起し、皆様のご意見を承りたいと思います。

一言で言えば、サインだけによるメイクアップを考え直してはどうかということです。このことについて、ガバナー月信の10月号に、小野田ロータリークラブの田中会長さんが「当たり前の話」と題して寄稿されています。その中で田中会長さんは、サインだけのメイクアップを「不気味で悪魔が手招きするようなメイクアップ」とすばらしい表現をされておられます。そして、これと決別して実質的な出席率で物を言う方が、ロータリークラブの全体のモラル向上につながるの信念でもって、1年前からサインだけのメイクアップから決別されたそうです。

私は、この小野田ロータリークラブの勇断にまず敬意を表するとともに、この考え方に全面的に賛同するものであります。

一方、「ロータリーの友」1月号、これに国際ロータリーの元理事の千玄室さんが「本当にロータリーを理解するためには、まず例会等を通じてロータリーを楽しむことだ」というふうに述べておられます。例会を楽しむことと、例会出席率を形の上だけで整えることとは全く関係がないと思います。

私は、クラブの中でもこのような問題提起をいたしました。それに対する反論は、例会へ出席したいのは山々だけど業務多忙で例会出席がままならない者にとって、この制度はロータリーに心をつなぐための大変いい制度だということでありました。しかし、そのようなセンチメンタリズムを容認いたしますと、本来のメイクアップである他クラブの例会に出席しようとする努力とか意欲を削いでしまうのではないのでしょうか。

「ロータリーの友」の中で、最近新人会員の声が多分載っておりますけれども、この声の中にも、不気味で悪魔が手招きするようなサインだけのメイクアップに疑問を投げかける意見が少なくありません。他の地区、他の国ではこの問題はどうなっているかということも知りたいところです。

皆さん方のご意見を承りたいと思います。以上です。

【佐藤ガバナー補佐】

ありがとうございました。

それでは、次に、大竹ロータリークラブの小城さんから、大竹が独自でなさっているどんぐりの話が多分出るのではないかと思いますけれども、よろしく願いいたします。

【大竹RC小城様】

多分出るのではないかとではなく、それしか言えないので、たとえ私が後半に控えております活動についてとか将来の方に配属されても、話す内容は多分同じになるのではないかと考えております。

私は、ロータリーの基本について皆さんのように格調高くお話しできないことは非常に恥じとは思っておりませんが、私は私なりのロータリーの理解とそれを実践することによって自分自身の生きがいを見つけていければいいという判断で行動を行っております。

青年会議所時代を18年間も過ごしておりますと、この会場の中にも大先輩の方がたくさんおられまして、こういう席に来ることがある種同窓会のような感じがして、また、こんなになっておられるということでもあるし、こんなふうに年とりたくないと思われる先輩もおりますし、非常に私にとって恵まれた時代を青年会議所からこのロータリーで過ごさせていただいてきております。

先ほどお話にもありましたように、私も、自分の親父も大竹の会長を務めておられて、そのそばからロータリーの活動を見ておりました。今日はどこそこの何かの奉仕でたすきがけで出たりとか、また、年頭の書道の大会においてはトロフィーの授与があるのだというようなことで、いろいろ年間には1万円のお祝金とか、2万円クラス、3万円クラスと、本当に今の現在でもずっと昔からもう相手の方から決まって要求してきておられるというような状況でございます。

しかし、世の中の言葉に形骸化という言葉がございまして、今も会場の方からサインだけの例会、僕はこのサインだけの例会もいいと思っております。なぜならば、7日に1回ロータリーということに心を寄せるということだけで十分だというふうに思っております。センチメンタリズムが云々言われますけれども、この世の中センチメンタリズムがないほど色も艶もないような人生を僕は送りたいというので、私はセンチメンタリズムは大賛成であります。

こうしてロータリークラブの11年目を過ごしておりますけれども、入った翌年にちょうど30周年がございまして、そのときにどんなことをやろうかという事業計画のアンケートの調査がございました。私は、いつも父の時代のことを思っておりますので、大竹の駅前に時計を据えましょうとか、玖波の駅前に時計を据えましょうというのはやめたいと、そういう時計を据えたりとか花いっぱい運動もそれはそれで立派ですけれども、そうでなくて、僕は自分としてはその当時自分も救急車に乗った経験がありましたものですから、大竹のあの時代の10年前の救急車には無線しかなかったんですね。無線ということは、つまり消防署の本署と救急車しか連絡が取れない。救急車から直接病院にアクセスが取れないということです。そういうことがわかっておりましたので、自分としては救急車に無線電話を取り付けてあげたいと。そして、1人でも多くの命が1秒でも速く病院に駆けつけることによって助かることに寄与できれば、30周年の立派な記念事業ではないかということをアンケートに書いておきますと、それが採用されまして、あの当時、大竹の2台の救急車に電話をつけたことを思っております。

僕はそういう、別に自分は自慢ばなしをしているのではなくて、自分でロータリーのバッジをつけたからには、こんな納得の仕方がしたいということで今お話しをしているだけでございますので、そういうふうにお聞きいただければと思っております。

そして、ときがたって35周年のときに、実行委員長の職が回ってまいりました。じゃあ自分が実行委員長を受けるのであればこんなことがしたいということで、それまでの自分の持論のようなことを話しておりました。それがこの「どんぐり」でございました。

私も長い間、教育委員会の教育委員をしておられて、悩める子どもたちについては、本当に校則とか規則とかばかりで縛ってやるとかわいそうだなと思う。本当に親がどうしても子どもが泥まみ

れになることをさせないのか、嫌がるのか。そして、危険だからといって塀をして、柵を立てて、黄色いテープを貼って、行政がそこから先に子どもに冒険をさせないのかと。我々の時代とは全然違うということについて非常に疑問を持っておりました。子どもたちとともに、このすばらしい地球でおってたった1回しかない人生をもっともって泥にまみれて汗をかくことによって、彼らが成長してくれればと思っただけで、どんぐりということですね。どんぐりを選んだのは、実を付ける木はたくさんありますけれども、言葉の響きがいいということが正直一つにはあります。それとどんぐりは、葉っぱが落ちて、それがときを重ねていけば蓄積して行って、山の緑の腐葉土ということになって、そのことの勉強もさせてやりたい。そしたら、川がきれいになって、海がきれいになって、それは云々というのは、これはもう皆さんご承知のとおりでございますけれども、ご承知のとおりであっても、実際に子どもは本でしかそれを見てなかったら、余り意味がないと僕は思ったものですから、子どもたちを呼んで、一緒に大竹市内の子どもたちを250人集め、また、これは大きく環境の問題になるわけですから、ご承知のとおり、大竹は紙パルプ、石油産業の方で公害には非常に大きな問題を持った町でございましたので、その企業の方々の若い諸君に声を掛けて手伝っていただいて、約150名出てこられました。で、一般市民の参加の方、全員で約550名ぐらいで2500本のどんぐりの木を植えていくと。

そのときに、いろいろ山に登ることですから危険が伴うので、当時大竹には18歳から20歳ぐらいの方が通われる専門学校がございまして、評判は余りよくなかった。非常に素行の悪い連中のいる学校でございましたけれども、茶髪でお決まりのコースのような学生なんです。しかし、手を借りるところがないから彼らに説得をして、小学校の生徒5、6名を1チームにしてそのリーダーになってほしいと。そして、君たちがリーダーとなって子どもたちと一緒に山にどんぐりを植える手伝いをしてほしいということ、つまりリーダーとなるためにはリーダー研修が必要でございますので、専門の方をお招きして、水産場の方もお招きして、また森林インストラクターの方もお招きして勉強しました。ところが、勉強会をやっても彼らは後ろを向いて勉強をしない。居眠りはする。なるほど、これは学校が困るなと。こういう悩める青年もいるんだなと、どうしようもないと思っておりましたけれども、しかし、実行当日山に登って、子どもたちが「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と呼んでいる相手は、レクチャーのときに僕が一番印象の悪かった茶髪の子でした。しかし、彼は手にスコップを一たん持ってしまうと、汗をかいて、額に汗をかいて首に巻いたタオルで汗を拭きながら、子ども達と一緒にやっている姿が非常に僕には美しく映りました。

僕は、やはりこのロータリーというところにいることで、こういういい光景に恵まれたし、いいことに気が付いたなというふうに思っておりました。こんなことを思っておりますと、最近新聞で報道されておられます広島市の暴走族の問題、これが公判が行われまして、弁護士の方は無罪を主張される方、そして検察は有罪だという。それは何でかと言ったら、広島市が決めた市条例のもとで。この条例をとにかくどどんつくって行ってこういうふう縛り付けていけばものが解決するのではなくて、我々は血の通う人間であるし、暴走族だってこの世に一度しか生まれてこない命であるとするれば、我々ロータリアンとして彼らにもっと違うアプローチの仕方が、検察や弁護士とは違ったスタンスでできるのではないかなということを私は思っております。

この小さなどんぐりを、僕はロータリー生活の中でのライフワークとしてずっととらえていきたいと思っておりますし、こうした少年たちと実のなるどんぐりというものが本当にどれだけ大切なのかということを自分自身もまだまだ理解を深めながら送っていきたいと思っております。

本当はもう少ししゃべりたいこともあったんですけども、いただいた時間になりましたので終わります。

【佐藤ガバナー補佐】

ありがとうございました。

このお話は、近々の友誌に掲載されます。ちょっとここで何月号と言えないのでお許しをください。地域の子どものために直接的に子どもたちを巻き込んでという言葉はどうでしょうか。巻き込んで時間と人手のかかる地道な社会奉仕活動を長年にわたって継承されているお話でございます。

もう一方、フロアからご発言いただきます。安佐クラブの奥芝さん、いらっしゃいますか。どうぞ、関連があるようでありますので。

【安佐RC奥芝様】

広島安佐ロータリークラブの奥芝でございます。

今少ししゃべりたいのですが、恐らく時間の方がなからうかと思いますが、2点ほど、本当に私どものクラブ、浅いクラブでございまして、発足当時から地域に根差した社会奉仕、職業奉仕をやろうじゃないかという観点から、今職業奉仕につきましては、安佐南区の中学校へ我々会員の方がコアに参っております。そして、私たちの職業観、それから子どもたちに伝えるものは何だろうかというお話をさせていただいております。

そしてもう1点は、社会奉仕といたしまして、これは安佐北区の女性剣士、剣道親善交流大会というのを主催させていただいております。それで、まだ今年で3回目になるのですが、1回目は小さな本当に小学生から一般のお母さん、女性だけの剣道大会でございます。そこに1回目は我々のロータリーとはというご説明をプログラムに書かせていただき、2回目におきましては、我々の理事役員会においても賛否両論があったのですが、ポリオ撲滅の基金をお願いすればどうだろうかということで、第2回目はご説明をいただき、本当に100名ほど参加いただいたわけですが、1万4千円ほど集まり、寄附をさせていただきました。そして、将来的には恐らく安佐南区を巻き込んでの大きな大会にしていきたいと思っております。

その点、またガバナー事務所におきまして、我々本当に22人のクラブでございます。少ないなりに予算を立てながらやっておるわけですが、万が一何か手続によって寄附が出るよという言葉がございましたら、ありがたいなということで、一応2点だけ申し上げさせていただきます。締めさせていただきます。ありがとうございました。

【佐藤ガバナー補佐】

ありがとうございました。後ほどまたガバナー、ガバナー事務所からのお返事があろうかと思えます。そちらのパネリストの方々、追加発言がございましたらどうぞ。よろしいですか。

今歴史の伝統、あるいは継承、あるいは大変に厳しい社会情勢の中で、ロータリーの運営をもう一度根本から見直す時期ではなからうかというようなご提言、また長年にわたって継続している社会奉仕活動をこれからも続けるぞ、続けたいというお話等々ございました。また、具体例でありますけれども、サイン例会というものを見直したらどうかというお話等々あったわけでございます。

一応各パネリストからご発言が終わりましたので、ここで、筒井パストガバナーにマイクをお渡しをして、まとめていただいてご指導をちょうだいできればと思います。

先ほどちょっと事前打ち合わせをしましたときに、パストガバナーが実はバンコックから帰ったばかりだということで、国際的なお話とロータリーと、その辺の関連の話でというふうに注文をさせていただきます。よろしく願いいたします。

【筒井パストガバナー】

それでは、今日6クラブの皆さんからいろいろとお話をお伺いいたしまして、その中で共通事項が、例会の出席という問題、出席のメイクアップの仕方という問題がありまして、これは現川妻ガバナーも非常に頭を痛めていらっしゃるご項目でございます。

それでは、まず例会の出席につきまして、なぜロータリーは例会の出席をやかましく言うのであろうかということについて、私見になるかもわかりませんが私の意見を発表させていただきますと、要するに我々ロータリアンは、例会に出席をして、異業種の方々と、あるいは職業で成功した、あるいは自分の企業で失敗したこと等をお互いに情報交換しながら、そこで切磋琢磨するために例会の出席をやかましく言っている。ある人は、ロータリーとは一体何かと、思いやりの普及運動であるというふうに教えていただいた先輩もでございます。あるいはまた、職業倫理観の向上を期するための、これがロータリーであるというふうに言ってくれた方もございます。そのようにいたしまして、我々ロータリアンは、例会に出席をして、お友だちをつくり、友だちからいろいろと情報交換することによって成長していくわけございまして、また東京の東ロータリークラブの佐藤千壽さん、これは職業に関しまして、私ガバナーとしてお招きいたしまして職業奉仕の話をお聞きしましたが、ロータリーは人づくりの場であると、このようにおっしゃった。このように思いやりの普及運動がロータリーである、あるいは職業倫理の向上運動がロータリーである、あるいは人づくりの場がロータリーでありロータリークラブである、このように教わってきました。

したがって、先ほど例会の出席にサインだけでいいかどうかということでございまして、これも私今考えておりますのは、サインだけというのは、メイクアップというのは、自分は忙しいから自分のクラブの例会に出られなかった、それを補てんする意味でありますから、できるだけ多くのロータリークラブの例会に出て、人間修養する、職業倫理の向上についての勉強をする会でございます。メイクアップというのはしようがないときに限ってメイクアップする。メイクアップした以上は、そのメイクアップしたクラブの皆さんと交友を広げ、同時にまたそのクラブのいいところを吸収して帰り、あるいはそこにおいてあったいろんな情報を持って帰る。やはり自分のクラブに出たのと同じように最後までよく広島地区の中には、途中でタクハイの時間になりますとさっと出てくるというようなことがございますが、こういうことは好ましい方法ではないのではなからうかと。本当の出席というのは、東ロータリークラブが発言いたしましたように、メイクアップしても最後までいて、そこでいろいろと

ロータリー情報を身につけて帰って来ると。これがロータリアンとしてのあるべき姿ではないのでございましょうか。

それから時間がなくなりましたので、今話題になっておりますところの規定審議会におきましていろいろと制約が今緩和されてきております。たしか98年の規定審議会、これはこの広島ロータリーの松井君のお父さんがインドで開かれました規定審議会におみえになりました。たしかこのときだと思います。それまでは自分のロータリークラブの例会前後1週間の中にメイクアップしなければ、欠席になっております。ところが、1998年の規定審議会におきまして、前後2週間というふうに変わってまいりました。それから、2001年、これは徳山の山田ガバナーがお見えになりましたが、ここでは1業1会員制というロータリーの基本がここでなまして、50人以下のクラブ5人まではよろしいと。50人以上のクラブにおきましては10%まではよろしいというふうに1業1会員制が緩和されました。そういった制約が緩和されました。これはロータリーの入会をやさしくしよう、会員増強をうまくやっていこうというふうに考えられた結果が取り上げられまして、そういうふうな制度に変わりました。結果、逆にロータリーの魅力を失う結果になったのではないのでしょうか。

で、新会員は入ってくれるけれどもやめていく、退会者が非常に多くなってきた。結局そのようにして入会者を増やし、会員増強を図ろうと思ったら、逆にロータリーの魅力がだんだん落ちてくるような結果になったのではないかと私は思っておりますのでございます。

したがって、今会員増強、会員増強といっている。それでは、ロータリーの会員増強する目的は一体何だろうかということ静かに考えてみますと、我々はロータリーに入って職業奉仕ということ教わった。その職業奉仕ということは、自分の企業の中にロータリーで学んだところのロータリー精神を持ち帰って、そして思いやりのある経営をしよう。思いやりのあると申しますというと、会社には従業員がおる。従業員に対する思いやり、あるいは取引先がある、あるいは客先がある、そういったところに対して、ロータリー精神をベースにしました企業経営に基づきまして、企業活動を行うことによりまして、企業は発展をする。企業が発展すれば、地域社会に貢献できる。その結果として、ロータリアンが多くなりまして、あるいは今個人奉仕から団体奉仕へ少し変わってきましたが、その団体奉仕がその結果としてできるのであると。まず個人奉仕、ロータリアンが自分の企業を通じて職業奉仕活動に励むことによりまして企業が発展する。その発展の結果によって、団体奉仕のできる、ロータリーが増える。そういうふうに私は常々考えておるわけでございます。

したがって、例えば有名な話でございますが、1929年頃から40年頃にかけて、非常にアメリカも不況でございました。そのときに、1954年から55年にRI会長をやられましたハーバード・テラーがある倒産しかかった企業の再建に成功されたということ、そのときに4つのテストというのがございます。その4つのテストをハーバード・テラーさんが会長になったとき、その教書運動をしきりにやりまして、今この4つのテストは50数カ国の言葉に翻訳されまして、あるいは市の、あるいは町のいろいろな目標の中に数えられておるようでございます。

また有名な話、その不況のときに、ロータリアンの経営していた企業の倒産が皆無であった。それは、平素からそういうふうにロータリー精神を取り入れまして企業経営に携わっておりますと、私どもの企業の倒産はない、こう信じております。

先ほど佐藤ガバナー補佐から、タイへ行ったからそのときの話をとりましたが、時間がございませ

るので、1~2分だけ時間をちょうだいしまして。

実は、突然先々週の水曜日に9時半頃電話があって「すぐ来てくれ」と言うものですから、その日の午後たつて、バンコクへ4日間旅行して参りました。その大きい理由は、皆向こうの私どもの客先は製糖工場でございます、製糖工場はオーナー企業でございますから、一つの契約をするにおきまして、マネジメントトップが来て話をしたいと。そして、その会社のトップがどういうふうな理想、理念を持っているかということ話を話して決めたいというために、すぐ来てくれということでした。それで、10分か15分話しておりますと、私のこのロータリーのバッジを見まして、「あ、君はロータリアンか。わしもロータリアンだったんだ」と。私も「今40数年ほどロータリー生活をしておって、ロータリーでいろんなことを学んでいる。したがって、商取引においても絶対真実しか語らないんだ」と言って、持っておりましたロータリー手帳を見まして、ロータリー手帳の4つのテストを示したわけでございます。そして、ここに英文で書いてあるIt's the true、それは真実かどうかということにつきまして話をしてまいりまして、成約をしたというような話もございました。

どうか皆さん、この職業奉仕の理念を追求していただきまして、その職業奉仕の理念をもって企業経営していただくならば、企業は必ず倒産することなく、発展すること間違いなしということを私も皆さんに発表いたしまして、まとめとさせていただきます。どうもありがとうございました。

【佐藤ガバナー補佐】

ありがとうございました。

私の手元の時計でびったしでございます。パネリストの皆様方、ありがとうございました。フロアからの発言もありがとうございました。

お陰様をもちまして終了させていただきます。ありがとうございました。

【司会者】

第1部の皆様、本当にありがとうございました。

いま一度盛大な拍手をよろしく願います。